

## もっと図書館の利用を

附属図書館運営委員・総合科学部 岸江信介



附属図書館が主催する図書館利用のためのオリエンテーションに毎年新生の多くが参加するが、案外、図書館の肝心な部分が理解されていないという印象を受けることがある。例えば、昨秋、卒業研究に取りかかっている学生から図書館の蔵書数が少ないため、読みたい図書や論文が容易に手に入らないという話を聞いた。このことを図書カウンター職員に相談したかと尋ねてみたが、相談することはなかったという。Webcat Plusなどの存在はおぼろげながら知っていても実際に書籍の検索をして書籍を取り寄せたり、論文の一部のコピーを送ってもらったりしたという経験がない学生は4年生になっても意外に多いように思われる。全国の多くの大学の図書館がネットワークで結ばれており、互いに利用できるシステムなので教職員、学生ならだれでもこのサービスが受けられるのだから蔵書数が少ないとか読みたいものが容易に入手できないとか嘆く前に積極的にこのサービスを利用して、全国の多くの大学図書館が一つになっているという実感を味わってみるのもいい。

また、あるとき、留学生から修論を前にしてどうしても読んでおきたい新刊図書があるという相談を受けたことがある。県立、市立の図書館なども探してみたが見つからず、少し高価なので個人での購入を躊躇しているという。では、附属図書館で購入してもらうように頼んでみたらどうかと答えたところ、ためらいを隠さずに「私が希望する本を本当に購入してくれるのでしょうか」という質問が返ってきた。どうも自分だけが読みたい本を図書館がそう簡単には購入してくれるはずがないという先入観を強く持っている様子だった。ところが数週間後、この留学生がやってきて、「この本、図書館で買ってもらいました」と得意満面の笑顔で本を振りかざしながら話しかけてきた。この留学生のように自分が読みたい本を図書館に購入の希望を申し入れてもそうやすやすと買ってもらえないと思っている人が多いのではないだろうか。

図書運営委員の仕事に二年間携わってきて、附属図書館が公立の図書館とは決定的に異なる点にいくつか気づいた。その一つは、特に学生や教職員が図書館を常に利用しやすいように、そしてなるべく多くの方々に利用してもらえるようにと、図書館職員はつねに配慮し、努力しており、とりわけ学生に対しては、教育的立場から附属図書館を積極的に活用してほしいという思いでいろいろ工夫を凝らしている。なるべく多くの学生の要望を実現するため、個々の学生が希望する図書を優先的に取り揃えたいというのもその一環なのである。

学生時代を通じて、最も図書館を利用する時期は、一般的には卒業研究や修論に着手する時期であると思う。例えば、卒業研究や修論をすすめる過程で図書館がどのように利用されているのか、ぜひ知りたいところである。卒業を前にした学生に対し、入学後から卒業・修了までの間に図書館をどの時期にどれだけ利用したか、また、どのように利用したかなどについて卒業式や修了式までの間にアンケート調査などを通して調べてみるのも面白いのではないかと。附属図書館への要望としたい。

学生時代を通じて、最も図書館を利用する時期は、一般的には卒業研究や修論に着手する時期であると思う。例えば、卒業研究や修論をすすめる過程で図書館がどのように利用されているのか、ぜひ知りたいところである。卒業を前にした学生に対し、入学後から卒業・修了までの間に図書館をどの時期にどれだけ利用したか、また、どのように利用したかなどについて卒業式や修了式までの間にアンケート調査などを通して調べてみるのも面白いのではないかと。附属図書館への要望としたい。

## 図書館に期待すること

附属図書館運営委員・ゲノム機能研究センター 高浜洋介



図書館メールマガジン「すだち」の発行二周年、おめでとうございます。他大学に先駆けてのメールマガジン創刊と、その後二年間の発行継続には、ひとかたならぬご苦労があったことと推察いたします。関係者のご尽力に敬意と感謝を申し上げます。

この度、運営委員のひとりとして寄稿依頼を頂きました。メールマガジンを含む情報電子化が普及するなか、本などの印刷物すなわち紙媒体の図書にどのような価値があるのか、日頃思い巡らせていることを中心に、以

下、図書館へのエールを書き進めたいと思います。

近年の情報電子化は私たちの生活全般に浸透しています。事実、この小文は、パソコンのディスプレイを眺めながらキーボードで入力しています。そのデータはデジタル編集され、ファイルとなり、場合によってはメール配信され、ひとの目に触れるかどうかはともあれ電子情報のままゴミ箱または保存デバイス行きとなります。パソコンとインターネットが普及した今、あらゆる文書がそのようにやりとりされるようになりました。大学人として接する機会の多い科学の世界では、瞬時に世界中の人達と情報交換できる利便性は極めて大きく、電子化

は情報交換手段の標準になりました。私自身、その有用性を享受しているひとりです。メールマガジンはもとより電子情報の擡頭に積極的に対応してこられた本学図書館が、今後も電子情報の活用を積極的に進めて下さることを期待します。

一方で、電子文書の普及は紙媒体を席卷し印刷物を過去の遺物にするでしょうか。私にはそうは思えません。自らの行動を翻った時、デジタル文書として入手した論文であっても、しっかり読もうとするときには、印刷して手に取り、斜めにしたり場所を変えたり、行きつ戻りつ読み直すことで、著者の思考回路を疑似体験しようとするのが日常です。また、どんなに電子配信ニュースが便利でも、毎朝食卓で新聞をめくる時間は新鮮ですし、本を開く音や匂いには胸が躍るものです。私には、電子ディスプレイにて情報を読む行為と、紙媒体を読む行為には、人の活動として本質的な違いがあると思えます。

机にあらうと膝に置こうと、少々持ち運びができたとしても、電子機器の利用には姿勢の角度に制限があり、限られた視線すなわち特定の思考回路で情報に臨むことが要求されます。しかも、紙媒体のように固有の装丁

も匂いも手触りもありません。多様な視点である事象に臨み、いろいろな考えを行き巡りつつ、少々突飛かもしれない思考の解決「eureka!」に至ろうとするとき、人は座ったり歩いたり、寝ころんでみたり場所を移したり、文字通り七転八倒します。この時、とことんつきあってくれるのは、持って運べて電池も切れず、様々な視線と姿勢に対応できる印刷物です。紙媒体には電子媒体が代替できない固有の特徴があり、それは知的活動にとって積極的な意義があります。知的活動の発信基地である大学の図書館には、電子情報の活用充実とともに紙媒体の適切な保存と活用を推進して下さることを大いに期待する次第です。

ふりかえれば私自身、入学した大学の図書館に初めて足を踏み入れた時、圧倒的な量の専門書と専門誌の並んだ書架の佇まいと匂いに「知の宝庫」を見る思いで感動したものです。電子媒体と紙媒体の意義を吟味しつつ、文化を発信する最高学府としての矜持を以て、今後も徳島大学附属図書館が運営されていくことを期待しております。

## 近世大名（蜂須賀家）家臣団家譜史料データベース公開の意義

総合科学部 桑原 恵



徳島大学附属図書館には、江戸時代に有数の国持ち大名であった蜂須賀家ゆかりの史料がいくつか収蔵されています。すでにホームページでも公開されている絵図史料もその一

つですが、そのほかにも蜂須賀家の家臣たちの家の系譜を知ることの出来る史料として「蜂須賀家臣団成立書并系図」という一群の史料があります。この史料は、蜂須賀家が家臣に対して、それぞれの家の系譜を書き上げさせたもので、天保5年(1834)に作成され、その後文久元年(1861)に書き継いで提出され、中には明治2年(1869)までを書き継いで提出したのもあります。家譜を提出した家臣は、家老などの重役から無足人と呼ばれる下級の家臣まですべてです。その内重役の家譜にあたるものは藩主個人の家に所蔵されて現在に至っており、下級家臣の部分は国立国文学資料館に所蔵されています。したがって、本学の附属図書館に所蔵されている史料は、最上級の家臣と下級の家臣を除く家臣団の家譜と言えます。その意味では、家臣団の中樞を占めていた家臣団についての系譜を知ることが出来る史料なのです。蜂須賀家は、よく知られているように尾張出身で尾張で勢力を伸ばし、その後播磨の竜野の領主となり、阿波の藩主となって明治まで阿波と淡路を支配していました。従って家臣の中には尾張出身のものや

竜野出身のもの、さらには阿波出身のものも存在しています。この「成立書」には各家の初代が誰で、どの出身であるかを始め、いつ頃からどのような役職を勤めたか、拝領した禄高や養子となって当主となったものの実父が誰か等までが詳細に書き記されています。また、各家の家譜の記述の最後には系図が付けられ、その後には家紋が描かれています。以上述べてきたことからもおわかりのように、この「蜂須賀家臣団成立書并系図」という史料は、江戸時代の徳島藩の家臣に関する貴重な情報が記録されたものであると言えるのです。

このような情報満載の史料ですので、その利用範囲も多岐に亘ります。図書館では、平成17年度に科学研究費の交付を得て、この史料についてデータベース化を進めています。今回作業では、成立書に記載された各家の当主の名前を取り出して検索可能にしています。例えば、古文書などで姓のみや名前のみしか記載されていない場合でも、家臣であれば、姓もしくは名前から該当する可能性のある家の成立書のページを知ることができるようになっています。このような検索が容易に行えれば、上述した豊富な情報の利用もよりスムーズに行うことが可能となります。今後は、データベースの公開を進めると共に、検索情報を増やすことによって、さらに広汎な利用を可能にしていきたいと考えています。